

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそ
うらいき。

第5組 天正寺住職

嶋地 正孝

text by Shoukou Shimachi

第10章 念仏には 無義をもって義とす

「自然法爾章」に「自然というは、自は、おのずからという。行者のはからいにあらず」と念仏は人間の計らいを超えた如来の大道であることが述べられています。しかし、あまりにも簡明すぎて私達に如来の大道がどう関わってくるのか解らなくなってしまう。「念仏には無義をもって義とす」とは如来の大道はどこまでも「人間に義なし」と分別を否定し、破られ続けていくことが救いなのだ教え、逆に「あなたはどこに立って念仏しているのか」と、念仏申している者に問いかけているのだと思います。

金子大榮先生は「親鸞聖人は、どういうふうな問いをもって、何を如何に学んでいるのか」ということを学ぶのであって、決して聖人の言葉を答えとし、観念的な論理を構築していくことではないと言われます。かつてある先生から「自分のことはだいじょうぶだと思ってないか」と問われました。聖人の言葉を答えとし、自己を正当化し、利己心を満足させる道具とした時、自我が増長していきます。しかし、念仏はそんな者でさえ突き動かしていきます。「第九章」で念仏を答えとしていた唯円は「念仏が喜ばません」と、教えを受けながら違うものを求め、教えからブレていく自分を問わずにおれませんでした。「喜べる、喜べない。分かる、分からない。」ということがすでに計らいです。それゆえ、

「親鸞も」の言葉に教えからブレていく自分を繰り返し、繰り返し教えに尋ねていかれ、自分を見失うことのない姿が思われます。

藤元正樹先生は「真理そのものは不増不減ですから、その誤解（迷い）こそ大切にされなければならない。真理はそうした誤解の中に住むものと言い得ましょう」と言われます。私達は計らいを離れることさえ計らっていきます。「異義篇」で歎異されている人々は本願の教えを深く考え、受け取られました。しかし、そのことが我が身に立つことにならず、逆に「諍論をくわだて」て勝他に立ってしまう。また「なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからず」と他を排除していく。そこにあるのは「歎異」ではなく、歎異されても計らいから離れられないことの「悲歎」なのでしょう。その意味で私達は計らいを通して、計らいが破られることの中でしか法に出遇うことができないのです。

曾我量深先生は「欲覚、瞋覚、害覚を起さざる所の法蔵菩薩の行というのは、真実に欲覚、瞋覚、害覚を起し、本当にそれに悩まされて居る所のものが、初めて開く境地でありましょう」と言われます。私達は煩惱の身をもって生まれてきました。それは、努力や計らいではどうすることもできません。煩惱の身に悩み、いくら思い計らってもどうすることもできない身に因位の法蔵菩薩は立ち上がられました。計らいが破れるとは法蔵菩薩が立たれた貪、瞋、痴の身に帰っていくことなのでしょう。それはある意味で、煩惱にしからしめられるままに法蔵菩薩の願心を信知していくことなのです。

聖人、八十八歳のお手紙に「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と法然上人の言葉が語られています。「ふみざたして、さかさかしきひと」とは自分のことはだいじょうぶだと思っている人です。「ものもおぼえぬあさましき人々」とは自分で自分のことをどうすることもできないと謙虚に仏言に耳を傾ける人々です。「念仏には無義をもって義とす」とは「人間とは偉いものではない、素直に念仏に学びなさい」と私達に謙虚さを要請している言葉なのでしょう。